

五七調の成立について

瀬古, 確
熊本大学教授

<https://doi.org/10.15017/12366>

出版情報 : 語文研究. 4/5, pp.25-29, 1956-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

五七調の成立について

瀬古 確

一

五七調の成立については既に色々の説が行はれてをり、或いは漢詩の五言七言の影響を受けたものとか、或いは日本語には二音から成る語が多く、これを二つとか三つ組合はせたものに、助詞を加へれば五音七音となり易いので、自然と五七調が出来上つたものとか言はれてゐる。

漢詩の影響については倉野憲司博士も否定的な説を唱へられてゐる。(註一) 目で見た所は如何にも五字と七字との漢字が用ゐられてをり、之を和歌に応用して五音七音の歌を作つたとすれば、單なる模倣ではないのであるが、万葉の用字法から之を見るに、一字一音式は寧ろ新しい表記法であり、初期にあつては訓読式の書法がその主流をなしてゐた所らかも、文字の視覚面からの影響をさほど強調す

る事は出来ないやうである。

日本語の性質からの説は常識的にはさもと思はれるけれども、この點については語学専攻の方々の解明に俟ちたいものである。

私はここには記紀の歌謡とか万葉の歌の音数を主として五七調成立の一面を考へてみたいと思ふのである。

もとより記紀の歌謡は一音一字で書記せられてをり、万葉の如く音数のまぎらはしいものは少いけれども、文字数が少いとは言つても、今日の訓みと同じ時間でこれを吟詠したものは俄かに断じがたい所である。もし今日の文字面では四音・六音のものも、一音分だけの音かを延ばして詠じたものとすれば、文字面では今日四音或いは六音に見えるものも、既に早く五音或いは七音と等しかつたわけである。

しかし記紀の歌謡の中には既に五七調のものもかなり見受けられ、一方では五六調に歌はれるものが、他方では五七調に歌ひかへられてゐるものさへあつて、五七調成立以前の姿を多分に伝へてゐるものと思はれるので、今日の文字面の一字をただ一音の音価として考へて、以下の考察を加へたいのである。

二

記紀の歌謡を見るに、整つたものは五音七音のものも見受けられるけれども、三音四音六音八音九音などのものも亦見受けられて、五音七音の立場から之を見れば、未だ整はない形のものが多いのである。

しかし大体において短長の組合はせになつてをり、五七調成立の過程を示してゐるやうに思はれるのである。

短長の形は上が軽く下が重い調子であり、短長の組合はせは当然五七調の成立を予約してゐるものと考へられるのである。

即ち短長の組合はせは三・四・五・六音などを短句として考へる時、三・六、三・七、三・八、三・九とか、四・五、四・六、四・七、四・八、四・九とか、或いは五・六、五・七、五・八とか、六・八などが見受けられる。し

かし中には少い例ではあるが、四・四とか五・三、五・四、五・五とか、又は六・三、六・四、六・五とかのものもあつて、長短の傾向もないではないけれども、不整形のものでも短句につづくに長句を以てしたものが圧倒的であつて、その最も整つた形が五七調の姿と考へられるのである。

例へば八千矛の神の御歌（岩波文庫記紀歌謡集の古事記五、以下の番号も同書による）を見て、四十八句中二十九句は五とか七とかの整形であるが、他は短句にあつては四音、長句にあつては五音とか六音・八音などのものも亦見受けられるのである。しかもその中に一方では「羽敲きもこれも宜はず」と歌つてゐるのであるが、六句を隔てて再び同じやうな短長の組合はせの繰返しを行ふに當つては「羽敲きもこれも宜はず」と五音・六音を以てしてゐるのである。即ち一方では五・七に歌ひ、一方で五・六に歌つてゐるのであつて、不整形より整形への推移の痕跡を同一の歌句によつて示してゐるものとして興味がある。

五七調の成立にはこの短長の組合はせが基礎となつてゐるのではあるが、特に五七調を形造るにあつて作用したと思はれる幾つかの場合があるやうである。

即ち五七調の成立にあつては短長の組合はせの長句で言ひ切る事が必要であり、それには次のやうな幾つかの場合

合が見受けられるのである。

先づ第一には短長二句によつてある事を提言し、次の短長句に於いてその理由を述べる場合である。

我が夫子が来べき夕なり。小竹が根の蜘蛛の行ひ今宵
しるしも（紀六五、衣通郎姫の歌）

の如きがその例であつて、前二句にあつては、我が夫の必ず今宵訪れて来る筈だと提言し、その理甲として小竹の根の「蜘蛛の行ひ」の著しい事を挙げてゐるのである。かかる例は万葉集にも多くを挙げる事が出来る。

我が王物なおもほし。すめがみのつぎてたばへる吾な
けなくに（巻一・七七）

馬ないたく打ちてな行きそ。けならべて見てもわがゆ
く志賀にあらなくに（巻三・二六三）

零る雪はあはにな降りそ。吉隠の猪養の岡の寒からま
くに（巻二・二〇三）

萱草吾が紐につく。香具山の故りにし里を忘れぬがた
め（巻三・三三四）
などの如きがそれである。

次に前二句によつて原因を、後三句によつて結果を述べ
る場合も

夕されば塩満ち来なむ。住吉の浅香の浦に玉藻茹りて
な（巻二・二二一）

の如くその例があり、その逆に結果を前二句で言ひ切り、その原因を後三句で歌つたものも

浦さぶる心さまねし。久方の天のしぐれの流らふ見れ
ば（巻一・八二）

の如く見受けられて、共に五七調成立の一因をなしてゐるやうである。

更に前二句によつて大まかに写し、後三句において之を細かに描くと言つた場合も

古に恋ふる鳥かも。弓絃葉の三井の上より鳴き渡りゆ
く（巻二・一一一）

妻もあらば採みてたげまし。佐美の山野上のうはぎ過
ぎにけらずや（巻二・二二二）

の如く見受けられ、上の句に第一希望を下句に第二希望を述べたものも

吾が欲りし野鳥はみせつ。底深き阿胡根の浦の珠ぞ拾
はぬ（巻一・一二）

直の逢はあひかつましじ。石川に雲立ち渡れ見つつ偲
ばむ（巻二・二二五）

などの如くその例に乏しくない。
或いは上の句によつて自ら問ひ、下の句において自ら答へる所謂自問自答の歌も亦

吾が背子は何処行くらむ。おきつものなばりの山を今

日かこゆらむ（卷一・四三）

の如く五七調を成立させるのに役立つてゐるやうである。
る。

猶初句二句に詠歎して三句以下にその理由を示す場合も

ここにして家やもいづく。白雲の棚引く山を越えて来
にけり（卷三・二八七）

吾が盛復変若めやも。殆にならの京師を見ずかなりな
む（卷三・三三一）

吾が命も常にあらぬか。昔見し象の小川を行きて見む
ため（卷三・三三二）

の如く五七調を成立させるのに役立つてゐるやうであ
る。

猶初句二句に詠歎して三句以下にその理由を示す場合も
ここにして家やもいづく。白雲の棚引く山を越えて来

にけり（卷三・二八七）
吾が盛復変若めやも。殆にならの京師を見ずかなりな

む（卷三・三三一）
吾が命も常にあらぬか。昔見し象の小川を行きて見む

ため（卷三・三三二）
の如く五七調を形造るのに有力であり、初二句に呼びかけ

を持つ場合も亦

大魚よし鯨衝く海人。其が荒れば心恋しけむ鯨衝く鯨

（記一一）

天飛む軽の嬢子。甚泣かば人知りぬべし波佐の山の鳩
の下泣きに泣く（記八四）

の如く第二句が言ひ切りとなり、自ら五七調を成すのであ
る。

但し後の歌は四六調を示してはゐるけれども、そのうち
「天飛む」は後には自ら「天飛ぶや」となつてをり、四六
調の五七調に遷る過渡の姿である事を物語つてゐる。

更にリフレインを伴ふのは、特に古代歌謡の謡物としての
の性質を残存するものであるが、第二句を第四句又は第五
句において反覆する場合も亦五七調成立の一助となつてゐ
るやうである。

難波人鈴船とらせ。腰なづみその船とらせ。大御船執
れ（記五一）

多遅比野に寝むと知りせば、防壁も持ち来ましもの寝
むと知りせば（記七六）

麻裳よし紀人羨しも亦打山行き来と見らむ紀人羨しも
（卷一・五五）

吾はもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得
たり（卷二・九五）

などの如きはその例である。

又長歌において屢々対句の用ゐられてゐる事も、五・七

の連続を緊密にし、七と五との続きを防いでゐるものと思はれるのであり、これも亦五七調の成立に力強く役立つてゐるものの如くである。

三

五七調は特に記紀万葉の時代に栄え、七五調は古今・新古今と時代を下ると共に急速にその勢力を倍加して来てゐる事は周知の事であるが、(註二)七五調も人麿などは好んで之を用ゐてをり、枕詞とか序詞とか対句などの使用とともに、修辭に腐心した人麿の偉大さを物語るものとして注意すべきである。(註三)万葉にあつても、赤人などは二句切五〇パーセント、三句切三三パーセントを示してゐるのに対して、人麿は二句切の作品四一パーセント、三句切の作品四七パーセントをものしてゐるのである。(註四)

七五調の成立については別に論じたので、(註五)ここでは五七調の成立について些かその試案を考へてみたのである。たまたま郷里にあつて材料も十分手許にないので他日の補正を期してゐる。(昭和三一・九・五稿)

註一、万葉集大成第十一卷特殊研究篇「万葉集と上代歌謡」を

参照

註二、五七調七五調の統計については拙著「大伴家持の研究」一四頁並に万葉集大成第二十卷美論篇所収の拙稿「歌格の上から観た万葉美」を参照

註三、万葉集大成第二十卷美論篇所収の拙稿「歌格の上から観た万葉美」を参照。

註四、万葉集第十四号所収の拙稿「七五調の成立について」を参照。